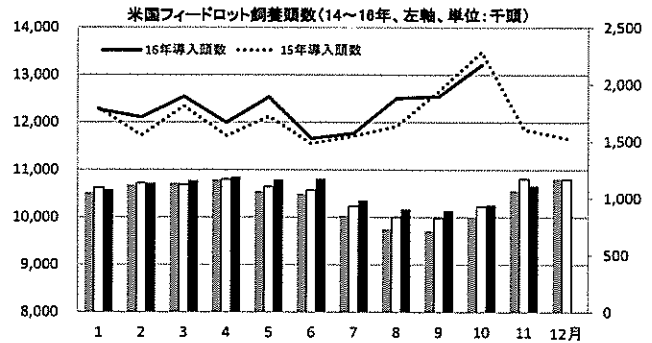


○ 11月全米フィードロット飼養頭数、9カ月ぶりに前年割れに転じる - USDA

米国農務省 (USDA) が 18 日に発表した全米フィードロット飼養頭数 (収容能力 1 千頭規模以上) によると、11 月 1 日現在の飼養頭数は 1,066.5 万頭にとどまり、前年同月比 1.3% 減少。ことし 2 月以来、9 カ月ぶりに前年実績を下回った。

10 月の導入頭数が 217.1 万頭 (前年同月比 5.0% 減) と少なかったうえに、出荷頭数が 170.5 万頭 (4.6% 増) と増加したため。10 月の導入頭数が 210 万頭台に落ち込んだのは 4 年ぶり。放牧地の環境改善に伴ってより重量級の肥育素牛を出荷するため、フィードロット外の飼養頭数が増加しているとみられる。10 月の導入頭数のうち、600 ポンド以下は 61 万頭 (5.4% 減)、600~699 ポンドが 52.5 万頭 (0.9% 減)、700~799 万頭 47.1 万頭 (9.3%



増)、800 ポンド以上が 56.5 万頭 (16.9% 減) だった。

また 11 月のフィードロット飼養頭数を州別でみると、テキサス州が 249 万頭 (4.5% 減)、ネブラスカ州 232 万頭 (5.3% 減)、カンザス州 224 万頭 (4.2% 像)、コロラド州 91 万頭 (3.4% 増) となっている。

○ 日本産畜産物の海外販売戦略について社会人講師が講演—日本獣医生命大学

日本獣医生命科学大学は 18 日、動物科学科の 1 年生を対象に「日本の畜産物海外販売戦略」をテーマに社会人講師による特別講義を開いた。講師には㈱ミートコンパニオンの常務取締役で日本畜産物輸出促進協議会理事を務める植村光一郎氏が登壇し、畜産物の中でも戦略的な輸出品目とされる牛肉について講演。和牛の価格上昇について触れ、需給関係も価格上昇の大きな要因としながらも、国内で消化できない高級部位を海外へ輸出することで現状の価格維持ができるということも大きな要因であると紹介した。



この日の講演で植村氏は、日本の肉用牛の飼養状況や輸出拡大策、牛肉輸出の現状と目標、輸出国の現状、牛肉の輸出環境の整備状況などを解説した。このうち輸出拡大策に関しては、①ジャパンプランドの確立②認定食肉処理場の増設③輸出解禁に向けた交渉—の 3 つの項目が重要だと指摘した。近年の牛肉輸出額については、11 年が 34.6 億円だったものが、15 年は 110 億円に増加し、20 年の最終目標が 250 億円であることを示し、現状、香港向けが 30.2 億円 (15 年) とトップで、米国や EU 諸国も順調に伸びてきていることを紹介した。また、輸出解禁に向けては、台湾の解禁が期待されており、輸出額アップ

の大きなきっかけになっているとしている。

さらに、実際の輸出をめぐる状況として、畜産物の輸出は米国や豪州のように実績経験がないため、生産国のイメージづくりといっ

たマスターブランディング構築ができていないのも事実であると指摘。そのうえで、「和牛の統一マーク」を活用して、日本産であることのアピールと最高級品であるというすみ分け

をしたブランディングに加えて、大臣級のトップセールスが常時行われるなどして、海外での和牛の人気は日に日に高まっていることも紹介した。

講義のなかでは、学生から海外での和牛の評価とアピールに関して質問が上がったが、植村氏はトリュフを例にとり、「キノコであるトリュフを誰もキノコのひとつとして扱いはしない、トリュフはトリュフ単体として認識されている。日本産和牛は牛肉であることは確かだが、トリュフのように別格で牛肉を超越したものとして認識してもらえようアピールしている」と答えていた。